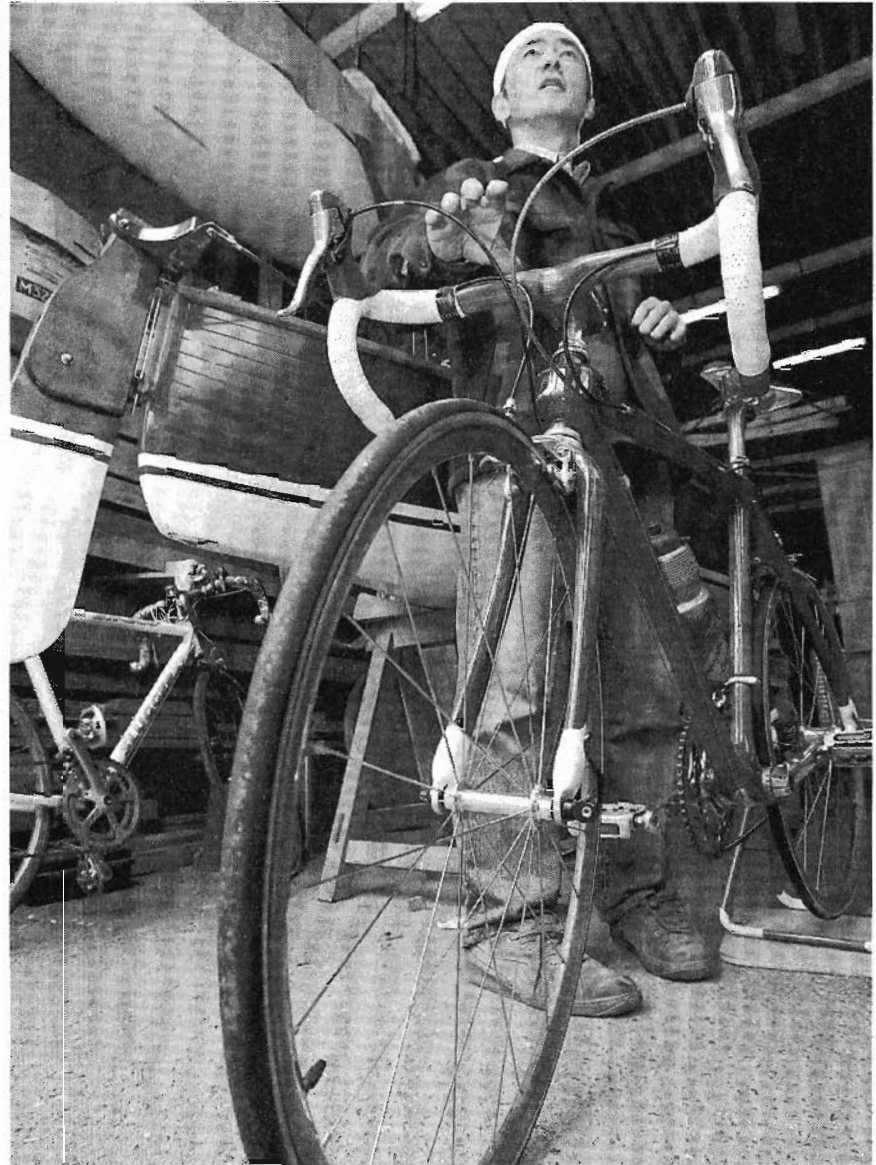


ヨット、自転車 木材で疾走

木の魅力伝える船大工



リムまで木で作られた自転車を前に「金属に負けない強度」と胸を張る佐野末四郎さん（10日、新木場で）＝横山就平撮影

いろいろあった。廃業も考えた。しかし、自分の造った船が海を走るすばらしさには、なにも勝てない。だから固執する。

新木場駅から徒歩数分の50坪に、「SANO MAGI C」の当主、佐野末四郎さん（50）の船づくり作業場がある。新木場は材木問屋が集まる街。佐野さんは、日本古来の木造船づくりの技術を駆使して、今に通用するヨットやボートをつくる。

3年前のある日、向かいの材木屋の外に、最新鋭らしい軽量自転車が停めてあるのを見た。聞けば、カーボン・ファイバー（炭素繊維）製という。そこで木の自転車を思いついた。自分の船がヨーロッパのボートショーに出たとき、

カーボン製より軽いくらいで、堅牢さでも負けないし、速いと評価された。ところが、日本に戻ると、美しいとは言われるが、船の性能は無視される。だったら自転車を木で。

「船と一緒に置いたらびっくりするだろう。和船づくりの技術で自転車もつくれるし、木は金属や化学製品に負けない強さがあることが一目で分かるはず」

製作に1台2、3か月を要し、4台目が年内に完成するはず。時速50きは余裕で出るという、重量も7キ台になって、カーボン製の6キに迫る。木製と言っても、大木から車体を切り出すわけではな

い。マホガニー材を0・8ミリの薄い板にし、重ねて張り付け成形する「積層」という方法。木の弾力を最大限引き出すのである。

あれもこれも、木と和船のすばらしさをわかってほしい一心からである。結婚するときは、木で「積層結婚指輪」をつくった。この愛の木製リングは、妻の指にいまも健在。

佐野さんには「佐野一族の末裔」の誇りがある。先祖は房総半島で船大工をしていたが、幕末近くに江戸に出た。おじいさんの代からは深川に暮らし、ずっと船をつくりつづけてきたのである。

枝川公一の東京ストーリー

佐野さんは、プラスチックや合板ではなく、厚い木材を蒸気で曲げながらつくる和船に、子どもの頃から魅了された。船大工として、生まれてくる時代を間違えたのかもしれない。

13歳でもう、父の一郎さんから、船体設計を学びはじめていた。高校生で、外洋ヨットづくりに手をつける。3年をかけたひとりで完成させ、進水させた。この船は、アメリカの木造船専門誌で大きく紹介されて、高い評価を受けた。

「日本の雑誌で取り上げてもらおうと連絡したら、高校生のおじいさんだ、と笑われた」と、30年以上経ったいまも、くやしい。（ノンフィクション作家）